
妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

【Nコード】

N3941Z

【作者名】

たすく

【あらすじ】

「来い」の一言が書かれた手紙を持って現れたのは、蔵馬（南野秀一）だった…！ 新世紀エヴァンゲリオンと幽遊白書のクロスオーバー作品。碇シンジの位置に蔵馬（南野秀一）。他のキャラも登場予定？

自サイトより転載。2000年ごろ書いた『妖世紀エヴァンゲリオン - Ayakashi Genesis Evangelion -』のリメイク版です。内容的には変わってないかと思われるま

ですので気を付けてください。

第壹話 転生

魔界と霊界。

魔界とは、数々の妖怪が住む世界。

霊界とは、『あの世』と呼ばれる世界。

魔界は、何階層にも別れており、上層部の一部を霊界が管理している状態である。

その管理している階層において、霊界の法における犯罪を犯した妖怪を退治する『ハンター』と呼ばれる存在がいる。

その『ハンター』が今、魔界において一匹の妖狐を追いつめていた。

「俺としたことがっ！！」

銀髪の妖狐がハンターから逃げていた。

ハンターの霊的攻撃のため、体のところどころに怪我を負っていた。

「このままではまずい。確実に殺される」

ハンターは、犯罪者を捕えて法に照らし合わせて裁くというより、その場で狩る（処刑）することが多い。

妖狐は魔界を脱出し、人界に向かう。

しかし、ハンターはまだ追ってきていた。

そして致命的な一撃を受けた。

「ぐあ…ここまでなのか…」

妖狐の意識がとぶ直前、目の前に穴が見えた。

「…！」

穴に吸い込まれ、妖狐の意識がとんだのだった。

妖弧の意識が戻る。

「これは……」

動けない体。

「俺は… そんな事が…」

……

……

……

……

……

…

目の前にいるのは人間の女性だった。

妖弧は人間として転生したのだった。

時に2000年…

伝説の極悪盗賊と呼ばれた妖弧蔵馬は人間として生を受けた…

第貳話 第三東京市

2015年……

あれから15年……

親戚の家に預けられていた蔵馬は、人間としての父である人物から手紙を受け取る。

『来い』

その一言と、謎の女性の写真。

（いったい今更、何のようだろう。関わりたくないんだけど…）

そう思いつつも行ってみることにした。何となくだった。

これが苛烈な戦いの始まりだったのである。

そして、蔵馬が、第三東京市につき、リニアを降りたときだった。

『本日12時30分、東海地方を中心とした、関東地方全域に特別非常事態宣言が発令されました。住民の方々は速やかに指定のシeltersに避難して下さい。繰り返しです…』

「特別非常事態宣言？ それはなんだろう。今の状況では判断できない。まあ、手紙に書いてあるところに電話して、情報を集めよう」
動揺するところか、冷静になった蔵馬は、封筒に書かれた電話番号で、電話を試みる。

『特別非常事態宣言発令のため、現在通常回線は全て不通となっ

ております。繰り返し…』

「不通か」

とりあえず、状況を判断すべきその場を動かず、周りを見回す。人っ子一人いないが、変わった様子は見られない。

そして、上を見上げると、普通では飛行してないモノを発見した。戦闘機だ。

「ん…？」

よく見ると攻撃をしているようだ。かなり遠くに煙が上がっている。

（戦争でも始まったのか？）

煙が少しずつ晴れていく。そこには巨大なモノが見え始めた。人型したモノだった。

（妖怪…？ ではなさそうだが。）

そう思っただけでいると、一台の車が走ってくる。

その車が、蔵馬の前に止まり、一人の女性が出てきた。

「南野秀一君ねっ！！ 遅れてゴメンツ！！ 乗ってっ！！」

「葛城ミサトさんでいいですね？ あれはいったい何ですか？」

（あの写真の女性だな。）

「落ち着いているわねシンジ君。 あれはね、使徒よ」

「使徒？」

「そっ…って、NN地雷っ！ 伏せて秀一君っ！！」

ミサトは蔵馬を抱えて車の中で伏せる。同時に大爆発が起き、その爆風で吹っ飛ぶ車。

「大丈夫だった？」

「ええ。砂が口に入っただけです」

「そいつは結構。じゃ、行くわよ」

ミサトが横倒しになった車を元に戻そうとするが、女性一人では持ち上がるわけがない。蔵馬も手伝い起こした。

「ありがとう。意外にパワフルなのね。よろしく。南野秀一君」

「こちらこそ。葛城さん」

「ミサト、でいいわよん」

そのころ、ネルフ作戦本部……

「ミサイル攻撃でもきかんのか！？ 全弾直撃のはずだぞ！！」

「クソがッ！！」

目の前のモニターには、いつさいの攻撃を受け付けないモノがうつっている。使徒と呼ばれるモノ。

その使徒を何とかしようとしてる軍人たちの後ろにサングラスの男と初老の男が立っている。

軍人たちが何処からの通信を受け取り、苦々しい顔しながら、その二人にいる後ろを向いた。

「南野君。これより本作戦の指揮権は君に移った。お手並みを見せてもらおう」

「了解です」

サングラスの男が言う。

「南野君。我々の所有兵器では目標に対し有効な手段が無いことを認めよう」

「だが、君なら勝てるのかね？」

口々に言う軍人たち。不快感は顔に浮かんでいる。

「そのためのネルフです」

南野は確信を持って言った。

「期待しているよ」

軍人たちはテーブルごと本部から退場した。

「国連軍もお手上げか。どうするつもりだ？」

南野の横に立っていた初老の男が口を開いた。

「初号機を起動させる」

「初号機をか？ パイロットがいないぞ」

「問題ない。すぐに秀一が来る」

（しかし、何故だ… 私が入手した死海文書の予言より、一年遅い… 何か不確定要素でも入ったのか…）

第参話 特務機関ネルフ

「特務機関ネルフ？」

「そ。国連直属の非公開組織」

「父がいるところですね？ 俺に何をさせるつもりですか？」

「それは、お父さんに会って聞いた方がいいわね」

「そうですか」

（国連直属… 情報統制は相当のモノのようだ。）

（取っつき難い子ねー。でも、なんで長髪なのかしら？ 似合っているから良いけど。）

しばらく二人で無言で道を進む。が、ミサトは道に迷ってしまったようだ。

「ここ、さっき通りませんでしたか？」

「ごめえん。まだ道になれてなくて」

「……………そうですか」

冷めた目で見られたのは、ミサトの見間違いではなさそうな気がした。

（なんて、冷静…）

「さっき通りましたね。ここも」

「…」

ミサトは何も言えなかった。

それからしばらくウロウロという表現が正しいと思うぐらい、道を進む。二人はもちろん無言だ。

（組織員としては、迷子とは失格だな。）

蔵馬のミサトへの第一印象はよくない。そこへ後ろから二人に声かけられる。

「どこへ行くの？ 葛城一尉。」

ミサトと蔵馬が同時に振り向く。白衣を着た金髪の女性が立っていた。

少し冷たい感じのする美女だった。

「遅かったわね。」

「ごみいん！」

ミサトが顔の前で手を合わせ、謝る。

「例の男の子ね。」

「そう、マルドウック機関から選ばれたサードチルドレン。」

「わたしはネルフ技術一課E計画担当博士赤木リツコ。よろしく。」

「南野秀一です。よろしく。」

『総員第一種戦闘配置。繰り返す、総員第一種戦闘配置。対地戦用意。繰り返す…』

突然、館内スピーカーから放送が流れる。

「ですって」

「これは一大事ね」

「それで、初号機はどうなの？」

「機動確率は0.0000000001%。09システムとはよく言ったものだわ。」

「それって動かないって事？」

「あら失礼ね。0ではなくってよ」

「数字の上ではね。でも、どのみち動きませんでした。じゃもう

すまされないわ」

二人の会話に我かんせずの蔵馬だったが、ふと蔵馬は一つ思った。

（たぶん父さんが呼んだのは、このためだな。）

蔵馬はミサトとリツコにある部屋に入る。ミサトが入り口を閉めると真っ暗になった。

「真っ暗ですよ」

リツコがスイッチを押す。

ライトがつき、蔵馬の眼前に巨大な鬼のような顔がある。

（靈気も妖気も感じない。いわゆる巨大ロボットというモノなのか。）

「ロボットと思ったと思うけど厳密に言うとロボットではないわ。人の造り出した汎用人型決戦兵器。人造人間エヴァンゲリオン。その初号機」

（人造人間……？）

「これが父の仕事ですか？」

「そうだ」

エヴァの頭上から声がかけられた。管制室と思われる部屋のガラス越しに自分の父親、南野ゲンドウを見つけた。

「久しぶりだな」

「……………」

「…出撃」

ゲンドウがつぶやく。

「出撃！？ 零号機は凍結中でしょ！？ まさか、初号機を使うつもりなの！？」

「他に方法はないわ」

「だってレイは動かせないでしょ？」

ミサトは蔵馬をチラツと見る。

「パイロットがいないわよ」

「さつき届いたわ」

「…マジなの？」

リツコはミサトから蔵馬に視線を移す。

「南野秀一君。あなたが乗るのよ」

「お断りします」

「即断なのね…」

「俺はよくわからない状況では流されないんですよ」

「座っていればいいわ。それ以上は望みません」

「お断りします」

「秀一君…！」

「正規のパイロット？がいるでしょう？　その方が乗れば良いんじゃないんですか？」

何も言えなくなってしまうリツコ。そこへゲンドウから一言。

「…そうか。冬月、レイを起こせ」

第肆話 出撃

しばらくして、廊下から包帯で巻かれた少女が運ばれてくる。ミサトが何か言っていると苦痛の表情で起き上がろうとするが、痛みか、すぐ倒れこんでしまう。

(…………… 正規のパイロット？が、この状態で乗せようとするのか。)

それを観察している蔵馬。少女は何度も起き上がろうとするが、すぐ倒れてしまう。包帯からは血が滲み始めていた。

(…………… 怪我の治療は適当、いや出鱈目だな。)

(…………… 父さん、いやあの男は何を考えている。俺を乗せるための作戦か？)

(…………… さっさと帰りたいところなんだけど見捨てることはできないな、よし。)

「彼女をのせるのですか？ ミサトさん？」

少し冷たい声をミサトに向けた。

「そうよ」

「では、俺が乗れば彼女をちゃんと治療してくれるのですか？」

「え？」

「傷口が開いているようですよ。出血が酷い」

ちらりと少女を見る蔵馬。

「……！ わかったわ」

「了解。……父さん」

少女から、ゲンドウの方へ目を移す。

「なんだ？」

「後で理由を聞くことにしよう」

「……………」

「………… えっと、それではどうすればいいんでしょうか？」

蔵馬は、声のトーンを少し上げミサトに聞いた。答えたのはリツコだ。

「私が教えるわ。ついてきて頂戴」

「わかりました」

「停止信号プラグ。排出終了」

「了解。エントリープラグ挿入」

「第一次接続開始」

「エントリープラグ、注水」

エントリープラグ内を黄色い液体が満たされていく。

蔵馬は着の身着のままの制服姿だ。黄色い液体で濡れていくのは多少気持ち悪い。

「何ですか？ この怪しい水のようなモノは」

ゆつくりと黄色い液体が上がってくる。感触はあまりよろしくない。

「ＬＣＬと呼ばれるモノよ。大丈夫。肺がＬＣＬで満たされれば直接血液に酸素を取り込んでくれるわ。すぐに慣れるから」

「慣れたくないですね」

「…… そう」

（結構毒舌家なのね。きれいな美少女顔しているのにね。女装すればモテモテなんじゃないのかな。）

場違いの事を思うミサトだったが、すぐ気持ちを入れ替えた。

（その辺の事は生き残ってからにしましょうか。）

ＬＣＬに満たされながら、蔵馬は違和感を感じた。

（妖気でも霊気でもない… 何かいる…）

「A10神経接続開始」

（神経接続？ 思った通りに動かすことができるのか？）

「思考形態は日本語を基礎原則としてフィックス」

「初期コンタクト問題なし」

「シンクロ率……… え？」

オペレーターの一人が目を疑う。

「どうしたの？」

「あ、すいません。シンクロ率、78・27%」

「なんですって!？」

その報告を聞いて、リツコが驚愕する。初めて乗った人間が出る数値ではなかったのだ。

「計測器は？」

「全て正常です」

オペレーターが機器のチェックを行うが、異常はなかった。何度も確認するも異常はなかった。

「…………… すごいわね」

驚きの声を上げるミサト。

「ハーマニクス、全て正常位置。暴走、ありません」

「いけるわ、発進準備!!」

ミサトの号令が響く。

そして発進準備が一通り終わると、ミサトはゲンドウの方を向いて聞く。

「かまいませんね」

「もちろんだ。使徒を倒さぬ限り我々に未来はない」

それを聞いて無言でうなづくミサト。

「発進!!」

すさまじいスピードで打ち上げられる初号機。そして地上に射出される。

しかし、場所をわかっていたかのように、使徒が現れた。

（そういえば、作戦聞いていなかったな……）

第五話 自爆

エントリープラグ内の蔵馬。

「敵の前に出されても困るのですが」

『う』

「確か作戦もないですよね？」

『う』

「次回があるかどうか知りませんが、その時はちゃんとしてください」

『……はい』

『何やってるのかしら？ ミサト？』

通信にリツコが割り込んでくる。

「リツコさん？ とりあえずどうすればいいのでしょうか？」

『秀一君。まずは歩くことだけを考えて』

「了解」

蔵馬は歩く事を考えるとエヴァは使徒向かって歩き始める。

（なるほど）

目の前に待ち構えた使徒がビームをエヴァに向かって発射。間一髪かわすと、後ろのある射出口のある建物が蒸発した。

（危ない危ない。しかしアレはなんだ？ 妖怪の類ではないようだが。）

ビーム発射後、ジャンプしていたであろう使徒が空から降ってくる。そして、頭を鷲掴みにされた。

そのまま、地面に叩き付けられる。

「ぐっ！？」

（叩き付けられたのはこのエヴァとかいうロボットの頭だ。なのに何故俺までダメージが来る！？）

(……そうか、ダメージもフィードバックされるといのか。)
使徒の胸部を攻撃し、なんとか拘束から逃れる。
今の一撃でエヴァ頭部が損傷したらしい。赤い液体が流れ出ていた。

『生命維持に問題発生！ パイロットが危険です！』

ミサトはこれ以上の戦闘はムリと判断した。

『作戦中止！ パイロット保護を最優先！ プラグを強制射出して！』

「待ってください」

しかし、オペレータたちの了解の言葉より先に蔵馬の声が発令所に響いた。

『秀一君！？』

「この操縦のコツがだいぶ判ってきました。大丈夫です」

助走して使徒へ殴りかかる。しかし、壁のようなモノで弾き返される。

弾き返された瞬間、八角形の波紋のようなものが流れた。

(なんだ今のは？)

くるりと一回転して、着地した。

『A・T・フィールドと呼ばれるものよ。詳細は残念ながらわかってないわ』

リツコから通信が入る。

「えーていーふいーるど？」

『現時点でわかっているのことは、壊さない限り使徒には近づけない、それだけよ』

「……わかりました」

使徒はA・T・フィールドを張ったまま、突っ込んできた。対応しようとしたとき、突然制御不能に陥った。

ドクン

そして吠えた。

「ウオオオオオオオオオンンンン！」

（何！？突然動かせなくなった。頭部破壊で異常発生したのか。

襲い掛かる使徒の A・T・フィールドに手をかける。そして、と無理矢理こじ開け始めた。

「グルルオオオアアア！」

完全にこじ開けると中に飛び込む。

そのまま使徒の腹部にある球体に一撃を入れた。使徒のA・T・フィールドが消失し、球体にヒビが入る。

何かを感じたのか、使徒がぶるつと震えるとエヴァに抱きついた。

$$(!?)$$

球体に光が集まりだした。

(これは一体！？)

閃光とともに大爆発が起きる。エヴァと周りの町もろとも……

「使徒が自爆しました!!」

「初号機はっ!!」

「初号機を確認!! パイロット生存!!」

「ほっ…… よかった。回収班および救急隊の出動を要請して」

「はいっ!!」

「南野、勝ったな」

「ああ」

目の前のモニタには、後始末が行われていた。もちろん、この
事実隠蔽される。

突如、司令室の暗くなり、番号の書かれた謎の板が姿を現す。

「使徒再来か。あまりに唐突だな」

「15年前と同じだよ。災いは突然訪れるものだ」

「幸いとも言える…… 我々の先行投資が無駄にならなかった点
においてはな」

「そいつはまだわからんよ。役に立たなければ無駄と同じだ」

「左様。もはや周知の事実になってしまった使徒の処置」

「情報操作、ネルフの運用は全て迅速かつ適切に行ってもらわ
ないと困るよ」

「その件に関しては既に対処済みです。ご安心を」

「しかし南野君。ネルフとエヴァもう少しうまく使えんのかね」

「左様。零号機に引き続き、君らが初陣で壊した初号機の修理代。国が一つ傾くよ」

沈黙の幻童。

「聞けばあのオモチャは君の息子に与えたそうではないか」

「人、時間、そして金。親子そろって幾ら使えば気が済むのかね」

「それに君の任務はそれだけではあるまい。人類補完計画。これこそが君の急務だ」

「左様。これこそがこの絶望的状况下における唯一の希望なのだよ。我々のね」

「いずれにせよ。使徒再来による計画の遅延は認められん。予算については一考しよう」

「では、後は委員会の仕事だ」

「南野君。ご苦労だったな」

「南野…… 後戻りはできんぞ」

第陸話 ゲンドウ

エヴァの暴走もあり、精密検査を行うため、蔵馬はネルフ直属の病院に来ていた。

検査結果が出るまで、廊下のソファで待つことになる。

（とりあえず、父さんから話を聞こう。判断はそれからだ。）

しばらくして、名前を呼ばれて結果を聞く。問題はなかった。

ありがとうございます、と診察室を退室した蔵馬はそのままエレベーターへ向かう。

そこにはゲンドウが立っていた。

「父さん」

「ついて来い」

そう言うつとエレベータに乗る。その後へ蔵馬も乗る。

「戦闘前に言った話をしたいんですが」

「今から司令室へ向かう。ここでは無理だ」

「わかった」

司令室につくとそこにはすでに冬月がいた。

「秀一君、大丈夫かね？」

「検査結果は問題ないようです」

「それはよかった」

ゲンドウが席につき、蔵馬は指令席の前に立った。

「話してくれますか？」

「アレは使徒と呼ばれる人類の敵だ。詳細はわかってない」

「敵と判断した理由はなんですか？」

「攻めてきた以上、対抗せざるを得ない」

「目的も不明ですか」

「ああ」

蔵馬はため息をついた。呆れたからだ。

「まあ、今はいいでしょう。何かわかったら話してくれますか？」

「…………… 良いだろう」

（隠し事満載ですか）

ゲンドウが詳細は知っているようだが話そうとしない。薄々と感づいていたが顔に出さない蔵馬。

「帰るのか？ 帰るのではあれば多少監視を付けざる得ないが」

（非公開組織だから、仕方がない。いざとなればいくらでも誤魔化せる。しかしながら、俺自身も興味がわいたのは確かだ。条件付きで乗ろう。）

「…………… 条件付きでよければ乗りますよ」

「その条件とは？」

「まずは住居。監視付で構わないのでマンションあたりをお願いします」

「問題ない。すぐ用意する」

「そして使徒。何かわかったら話してください」

「機密以外は伝えよう」

「機密が多すぎるような気がしますけど」

「……………」

「後は、俺が何をしようとも不干涉でお願いします」

「不干涉だと」

「さすがに一日中干涉されるのは嫌ですからね」

「わかった、問題ない。冬月」

「すぐに準備するでしょう。それでいいな、南野」

蔵馬には冬月に丸投げしたように見えた。

「父さん、丸投げはよくないですよ」

「……………」

半日もたたず、住居であるマンションの一室のカギが渡される。場所は、ミサトの住むマンションと同じ階であり、隣同士ではない。

（親睦を深めるという意味もあるし、監視という意味もある。離れているのは俺が年頃の男だという事か。興味もないが。）

第三東京市立第三東京高校への転入が決まる。ここは、もちろんネルフ支配下にある学校だ。

美形の転入生徒とあって、女生徒は黄色い声を上げ、男子生徒は嫉妬の声をぼそと上げた。

（高校生活が楽しめると思えないが、まあいいか。）

しかしながら、蔵馬はそう思うだけだった。

使徒が来ない間は、一学生として高校へ通う蔵馬。そして、授業が終わるとその足へネルフへ向かう。

名目上は戦闘訓練だろう。ゲンドウからすれば息子の調査であり、蔵馬からすればネルフの調査である。

どちらも詳しいことがわからないまま。

（……俺と志保利の子であることは間違いない。しかし……）
（組織が組織だけあって、監視カメラが多いな。しかも俺を探っている気配もある。父さんか、ここが気に入らない連中だな。）

その日の訓練でエントリープラグ内にいた。シュミレーション用だが、本物と変わりがない。

『おはよう。秀一君。調子はどう？』

リツコより通信が入る。

「悪くはないです」

『それは結構。エヴァの出現位置、非常用電源、兵装ビルの配置、回収スポット。全部頭に入ってるわね？』

「はい。」

『では、おさらいするわね。前にも言ったけど、通常、エヴァは有線からの電力供給で稼働しています。でも非常時に体内電池に切り替えると、蓄積容量の関係でフルで1分。ゲインを利用してもしせいぜい5分しか稼働できないの』

（……ウルトラマンですか、このエヴァという兵器は。）

『では、インダクションモードの練習、始めるわよ』

通信が切れるとビル群からこの前初号機が殲滅した使徒が姿を現す。蔵馬は無言のまま、パレットガンから銃弾が照射される。

そして、見事に命中。倒れる使徒。

『その調子よ。次。』

（こんな武器が通じるとはとてもじゃないが思えないな……）
ほぼ100%の命中率を見せる蔵馬。

ガラス越しからリツコ、オペレータの一人伊吹マヤ、その後方でミサトがその様子を見ている。

「しかし・・・よくまた乗ってくれる気になってくれましたね。彼」

マヤがリツコに言う。

「あの子は強いわ。あの程度でくじけたりしないみたいね」

（でも、何かがおかしい。射撃の腕はゲーセンでと言っていたけど、調査ではそんなのなかったし…）

ミサトは無言で初号機を見ているだけだった。

第漆話 逃げ遅れ

前回使徒が現れて数日後、通常通り蔵馬は高校で授業を受けている。

教師が何時ものように脱線が始まった時間、蔵馬の携帯が鳴った。ネルフより持たされた携帯である。

教師に一声かけると廊下へ出る。教師も蔵馬がネルフ関係者と知っているので「わかった」しかわなかった。

電話を見ると『綾波レイ』と表示されている。彼女との接点は少ない。ゆえに電話も今回が初めてであった。

「もしもし」

電話に出る蔵馬。

『私』

簡潔すぎる返答。

「何かあったんですか？」

『非常召集。先、行くから』

そう言つと電話が切れた。と、同時にサイレンが鳴り響いた。

ネルフ作戦本部

「総員第一種戦闘配置！」

冬月の命令が飛ぶ。ゲンドウは不在。

『了解。総員第一種戦闘配置。地対空迎撃戦用意』

「碇司令の留守の間に使徒の襲来か。意外に早かったわね」

「前は15年のブランク。今回はたったの三週間ですからね」
オペレーターの一人、日向マコトが答える。

「こっちの都合はお構いなしか。女性に嫌われるタイプだわ」
主モニターには使徒を攻撃する様子が映し出されている。しかし、ミサイルも銃弾も第三使徒同様まるで効果が見受けられない。

「税金の無駄遣いだな。」

冬月が半ば呆れた表情で言う。

「葛城一尉！！ 委員会からエヴァンゲリオン出動の要請が来て
います！！」

青葉シゲルが叫ぶ。

「うるさい奴らね。言われなくても出撃させるわよ。」

レイが到着し、蔵馬が続いて到着する。

「秀一君、悪いわね」

「作戦ありますか」

「うん。ライフルで牽制して様子見るしかないわね」

「前回から何もわからなかったんですか？」

「映像を見てもらえばわかるわ」

モニタに外の様子が映し出される。そこにはイカの胴体のようなモノが暴れていた。

「なんですか、あれ」

「使徒よ」

「前回とまったく姿が違いますか… これは厄介ですね」

「ゴメンネ。」

「時間稼ぎますから、対処法お願いします」

「わかったわ」

蔵馬はエヴァに乗り、使徒より離れた場所に射出された。

ビルを背に相手の動きをうかがう。

（あのビームの件もある。距離を取りつつ牽制ぐらいしか出来な
いかな。）

ネルフではなく蔵馬自身で判断した距離を保つ。しかし、うまく隠れているつもりであったが、突如使徒にエヴァの居場所がばれた。

エヴァの方へ移動してくる使徒。それをパレットガンで迎え撃つ。着弾と建物の崩壊で、煙があたりを包んだ。目の前が見えなくなる。

（しまった！）

煙から鞭のような腕（？）が飛び出し、エヴァが持っていたパレットガンを真つ二つにする使徒。

（これがヤツの武器か。）

『予備を出すわ！ 受け取って！』

即座にミサトはエヴァのいる近くのビルからパレットガンを射出。それを受け取ろうとした初号機だが、使徒によって阻まれてしまふ。

その一瞬がスキとなり、電源コードを切断される。

『初号機！ 活動限界まであと4分53秒！』

（なんとという反応速度の速さだ。エヴァに不慣れの俺だと追いつけない。）

さらに使徒の腕が初号機の足を捕らえる。そのまま持ち上げると投げ飛ばされた。

町はずれの神社。エヴァはそこへ落ちた。

（見かけ以上にパワーはある。…ん？）

システムがエヴァの足元に何かあることを示していた。蔵馬は足元を見るとそこには……

中学生と思われる人が三人いたのだった。

（逃げ遅れか…！）

足元に気を取られ使徒の接近を許した。使徒の鞭がうなる。

思わず両の手で受け止めた。しかし、エヴァの手が高熱を發した鞭で溶け始める。

蔵馬の腕にも熱さと痛みが走る。

（しまった！ このままでは俺はともかく足元の人たちが危ない！）

第捌話 ダブルノックアウト

「!？ 避難してなかったのね！」

「避難遅れというより、好奇心で見に来たというところかしら？」

「リツコ、なんでそんなに冷静なのよ…」

「ミサト、それよりどうするの？」

「使徒はエヴァが、秀一君が抑えてる。でも長くそう持たない。戦闘行為もできない。巻き込まれて最悪死んでしまう」

「ミサトは悩む。しかし、判断を下さなければならぬ。そのとき……」

『その逃げ遅れが見学が知らないが、こちらに來い』

エヴァの外部スピーカから声がした。

「秀一君!? 何をする気!？」

『命令違反の懲罰なら十分に後で受けますので、今はこれしかないと思います』

そういうと、エントリープラグを少し射出。そしてハッチを開けた。

「乗せる気!？」

この動きに反応したのはリツコだった。

「危険よ。そのエントリープラグは、パイロット特化型と言って間違いないわ。異物が入れば何が起きるかわからないわ」

『命令違反の懲罰なら十分に後で受けます』

もう一度そういうと強制的に通信をきった。

時間がない。投げ飛ばされたときに背中の電源コードが外れていたらしい。活動限界までのカウントダウンが表示されている。

エヴァは使徒に押され膝をついていた。いや、中学生三人を登らせるための処置か。どちらにしても蔵馬の限界は近い。

（やはりエヴァは背が高い。登るのは無理か。）

秀一は両手で掴んでいた使徒の手を片手に持ち帰る。そして、手を三人の前に差し出した。

『乗れ』

そういうと、三人は手に乗った。そして背中のエントリープラグへ持っていくとそのままハッチの中へ放り込んだ。

放り込まれた三人。

「うわあああ、み、み、水う。カメラ、カメラ」

「げぼがぼぐぼがぼ……………」

「きやあきやあ、スカートう」

ちらりと見る秀一。眼鏡をかけたカメラを気にする少年。ジャージを着た少年。そして二つに髪を縛ったスカートの広がりを感じる少女。

（少年が見学のために避難所を脱走、気が付いた少女が連れ帰るために避難所を出たというところか。）

問題なさそうなので、ハッチを閉じてエントリープラグを戻す。同時に、エントリープラグ内でエラーが表示された。

『ちよ。ちよっと待ちなさい！ 許可のない民間人を乗せられると思ってるの！？ 秀一君！？』

強制的に通信が入る。ミサトだ。

「もう入れましたが」

さらりと言う蔵馬

『く。仕方ない…… 退却して！ ゲートは34番！ 山の東側よー！』

「了解」

使徒の腕を引き寄せると腹？に蹴りを入れる。腕が切れ吹き飛

んで行った。

（今のうちに…）

しかし、時間が残っていなかった。カウントダウンを表示していたモニターの色が変わったのだ。1分を切った。

（間に合わない！？ ならば…）

『秀一君！？』

「時間切れが近いようです。何とかします」

『なんとかって……』

また強制切斷。

（作戦とか俺に丸投げ状態なんだから黙ってる）

そう思う蔵馬であつた。

使徒の腕が再生して、こちらに攻撃を仕掛けてくる。その攻撃をあえて腹で受けた。使徒の腕は貫通し、背中から飛び出す。

「ぐ………」

さすがに苦しい。フィードバックされる痛みや熱さ。耐えられるものではないが、蔵馬は耐えた。

その様子を後ろで見ているしかできない三人。

「私たちのために…」

少女がぼつりとこぼした。

「とりあえず動かないでください。終われば俺の一応上官にあたる人に怒られるかもしれませんが、自業自得です。覚悟していてください」

「はい…」

「すんまへん…」

肩からナイフと取り出す。使徒の球体の部分に突き刺した。使徒は苦しむが、こちらへの攻撃はやめない。ここは根性勝負だ。カウントダウンがついに10秒切った。

（間に合うか！？）

腕に力をこめる。深くナイフが突き進む。

そして・・・

エヴァ、活動停止。

使徒、活動停止。

ダブルノックアウトであつた。

「ふう」

蔵馬は一息ついた。

「だ、大丈夫ですか…？」

少女が恐る恐る声をかけた。

「なんとか…」

「ありがとうございます」

「いや…」

お互い腹を貫通し合った恰好のまま回収された。

格納庫につくと三人は、そのまま黒服の大人たちに付き添われて出て行った。

「秀一君大丈夫？」

「なんとか大丈夫です」

「リツコに検査受けてきて。あの状態で体にどんな影響あるかわからないから。その後ね、懲罰は」

「わかりました」

（学業優秀、スポーツ万能。人当たりも悪くない。一高校生としては飛び抜けているけど、本当に高校生なの？ 一流の傭兵を相手してるような気がするわ。）

リツコの職務室。実験室と言っても差し支えない様子の部屋だ。
蔵馬はそこへ呼び出される。

精密検査の結果が出たので、それを伝えるためだが、蔵馬に対して何かあると踏んでいるらしい。

「秀一です」

「どうぞ」

「失礼します」

扉を開けて部屋に入る蔵馬。

「精密検査の結果でしたか？」

「ええ。でも特に問題は見つからなかったわ」

「そうですか。ありがとうございます」

「ただ…」

「何かありましたか？」

「いえ、何でもないわ」

（検査結果に何か出たのか？ 人間ではなく妖怪としての妖狐としてのナニカが。）

「何か質問ある？」

「えっと、本来はミサトさんに聞くべきかと思うんですが、俺が助けた少年少女たちはどうになりましたか？」

「精密検査においては異常は見られなかったわ。出ると思ったけど良かったわ」

「そうですか」

一安心する蔵馬。自分自身もよくわからないモノに入れてしまったのだ。何かあってはたまらなかった。

「後は、ミサトに怒られてた」

「まあ、そうでしょうね」

「ここからは蛇足だけど」

「？」

「お下げの女の子と眼鏡の男の子の親族は、この関係者らしくてね。ミサトから解放された後怒られていたわ」

「なるほど。それは災難でしたね、彼ら」

「……探りを入れてきたのか？」

蔵馬は警戒をする。ただし、顔や態度には一切出してない。

「そうね」

「では。俺はこれで失礼します」

「お疲れさま」

蔵馬はリツコの職務室を退室した。

蔵馬が出て行ってからしばらくして。リツコは精密検査の結果を見ながら溜息をついた。

「かわった子ね。まあ、あの人の息子だからなのかしら？ それに…… 彼、人間？」

精密検査の結果には、不審な点は一切ない。健康そのものであると書かれているようなものだが、リツコは違和感を感じていた。ほんのわずかな違和感を。

「要観察かな。私個人の……」

数日後。倒した使徒のまわりはまるで工事中のビルのように囲われている。

その中では優秀なネルフのスタッフが十数人もかかって、使徒を調べている。リツコの姿もあった。

そこに、蔵馬を伴ったミサトがやってきた。

「あら、ミサト。いらっしやい。どうかしたの？」

「ちよつち、調査結果聞こうかと思ってね。秀一君はおまけ？」

「おまけは酷いですね、ミサトさん。俺は使徒についてわかればって思ったですよ」

「あら、使徒について知ってどうするのかしら？」

「初戦と二回目、作戦らしい作戦ありませんでしたし、死にたくありませんから、少しでも知っておこうかと思ひまして」

「なるほど」

「酷い、しゅーちゃーん」

納得顔のリツコにぶーたれるミサトであった。

それはわずかな間でミサトの顔つきが変わる。

「で？ なにかわかったの？」

リツコが手元のキーボードを操作する。すると目の前のディスプレイに601の文字が表示された。

「？ …なに？ これ？」

「解析不能のコードナンバーよ」

「解析不能のコードナンバー？ つまり、わけわかんないって事？」

「そうね。わかりやすく言えばそうなるでしょうね」

「でも、動力源はあったんでしょ？」

「らしきものはね。でも、一つだけわかったわ」

「一つ…？ 弱点でもみつかった？」

再び、リツコがキーボードを操作する。

「…これって…」

覗き込むように見るミサト。

「そう、人間の遺伝子と酷似してるわ。99・89%ね」

「99・89%… それって、エヴァと同じ……」

「エヴァと同じ?」

蔵馬が口を挟んだ。

「そうよ」

「そういえば、エヴァって人造人間でしたね」

「巨大ロボットに見えなくもないけどそうなのよ」

「見た目はともかく人間のような体型ですから、納得は多少できます。が、使徒はどう見て人間に見えませんか」

「そうなのよ。改めて、私達の浅はかさを思い知らせてくれるわ
リツコはため息をついた。科学者として色々とかかわってきた
彼女であるが、使徒ほど理解を超えるものはないらしい。

「そのようですね」

(まったく、俺はとんでもない所に来たようだな。……ん?)

蔵馬は、ゲンドウと冬月が来ていることに気が付いた。どうやら使徒の死体を見に来たようだ。

そこで、素早く二人の会話を聞き取ろうと集中した。

「これがコアかね?」

冬月がスタッフに聞いた。スタッフはいったん作業をやめて冬月に説明を行う。

「ええ。これ以外は劣化が激しく、サンプルとして問題が多すぎます」

「そうか… 南野どうする?」

「かまわん。他は全て破棄だ」

「わかった。情報を集められるだけ集めて破棄だ」

「了解しました」

スタッフはそういうと責任者の方へ向かって、ゲンドウの命令を伝えた。

（破棄か… そうだろうな。あれだけ巨大な使徒を保存してく場所もないだろう。）

蔵馬はそう思う。そのとき、ゲンドウが何気に手を後ろに組むのを見た。その手が火傷で覆われていた。

（あれは…）

「どうしたの？」

不意にミサトが声を蔵馬に向けた。会話に参加していたはずの蔵馬から反応が一切なくなったので心配になり声をかけたのである。

「いえ」

「あら、南野司令来てたのね。そっか、秀一君、司令を見てたのね」

「はい。……父さん、手のひら火傷してますね」

「火傷？ リツコ知ってる？」

「貴女がここへ来る前、零号機の実験中に事故があったの。聞いてるわね」

「聞いてるわよ。あの司令が素手でエントリープラグのハッチを開けてレイを助けたって聞いたとき、驚いたわ」

信じられないわよ、という顔をするミサト。それを見て呆れるリツコ。

「そんなことがあったんですね」

「その時のものらしいわ」

「怪我してかなり危険な綾波さんを出撃させようとした父さんとは同一人物とは思えないですね」

「意外に毒舌なのね」

「そうでもないと思いますよ」

（秘密でもあるのか…？ 綾波レイには…？）

第拾話 綾波レイ

しばらくして、リツコに呼び出されてリツコの私室。

「何か御用ですか？」

蔵馬は内心疑りながら答える。表情には一切出ていないが。

「帰るところごめんなさいね。ちょっとお願いがあるんだけどいいかしら？」

「人体実験は申し訳ないのですがお断りします」

さらにとひどいことを言う蔵馬。

「そんなことしません！　って誰から聞いたの？」

「ミサトさんです。真顔でそんなことを言っていました」

目はおもっいきりからかいの目だったが、とは言わない蔵馬。

「ミサトめ…　秀一君になんてことを…　後で覚えておきなさい…
！」

「人体実験以外に何かありましたか？」

「秀一君……」

あきれるリツコ。

「すみません。本題はなんでしょうか？」

「ああ、ごめんなさい。これを届けてほしいのよ」

机の引き出しから一枚のカードを取り出し、机の上に置いた。

「これは？」

「綾波レイの更新カード。渡すの忘れちゃった。明日でもいいので、本部に来るときに届けてくれないかしら？」

「なるほど…　わかりました届けます。でも俺、彼女の家知りませんよ？」

リツコは住所の書かれた紙を取り出す。

「彼女の住所よ。これでいいかしら？」

リツコから紙を受け取り、読んでみる。

（マンモス団地と呼ばれる場所……彼女こんなところに住んでるのか。しかしこれで、綾波レイ……彼女の事を知ることが出来るかもしれない……）

蔵馬は溼の住んでいるマンションにやって来た。マンモス団地と呼ばれている場所である。

元々は、都市建設に従事した人々が住んでいたマンション街であったが、使徒の襲来による疎開で今では人の気配は全くない。対使徒のための設備建造のため、道路を挟んだ反対側のマンションの大半は壊されている。まさに廃墟と言っても差し支えない。

（…………… 4号棟の2階だったな。）

住所の書かれた紙を眺めながら歩く蔵馬。

（人の気配が全くない。それどころか、妖気や靈気類も全く感じない。こんなところに住んでいるのか。）

4号棟を見つけ、2階へ階段で上がっていく。そしてレイの部屋の前についた。

（俺が思うべきことではないが、女の子の住むような場所ではない。裏に何かあるとは思えないが。）

蔵馬はインターホンを何回か押すが、鳴った気配は無い。

（故障か…………）

「綾波さん？ いないのか？」

ドワノブに手をかけると、カギが開いてることが分かった。

（不用心だな。）

不審に思いながら、ドワを開け中を覗き込んだ。

目の前には殺風景な部屋があった。簡易的なベット、カラーボックス、小さな冷蔵庫が見える。

（……これが女の子の部屋なのか。）

蔵馬は女の子とは無縁の生活を送ってきた、自ら人との接触を避けて……だが、これは酷いと思った。

（父さん……いや、あの組織が何を考えているか知らないがこれは酷すぎる。ミサトさんに話してみるか。あの人の性格上なんとかするだろう。）

人を避けているようで、人物はよく観察している。これも昔からの習慣に近い。

そこへ、レイが奥から出てきた。

「!？」

流石の蔵馬も驚いた。シャワーから出たのだろっ、肩からバスタオルをかけた状態のまま出てきたのだ。

「何？」

「カードを届けに来たんだ。リツコさんがこれを渡すの忘れたそうだ」

蔵馬はレイに背を向けて、一枚のカードを取り出した。そしてそのカードの玄関わきの棚の上に置いた。

すると、後ろから濡のぺたぺたと歩み寄ってくる音が聞こえる。

「そう」

「それから……」

「何？」

「自分の部屋だからって、玄関まで裸の状態で出てくるのはよくないよ」

「そう」

その返事を聞いて、蔵馬は玄関を出てマンションの外へ出た。

そして、レイの部屋を見上げながら思う。

（羞恥心とか無いのか？ あの少女は……それに感情というものが感じられない。）

数日後。零号機の起動実験が行われる日。

蔵馬は途中でレイを見つけ一緒に行くことにした。探るためでもあった。

「綾波さんは怖くないの？」

「何が？」

「エヴァに乗るのが」

「貴方は怖いのか？」

（……別に怖くはないが。魔界では日常茶飯事だったしな。怖いと言ってみるか、何か引き出せるかもしれない。）

「怖い…かな。怖くないっていう方がおかしいと思う」

「そう。貴方はお父さんの仕事信じられないのか？」

「父自体信じてない」

蔵馬がそう言うと、レイはずっと蔵馬を見た。

「私は信じてるわ。信じられるのは司令だけ」

そう言つと少し足早に歩いて行った。

（どうやら闇は深そうだな……）

第拾壹話 ヤシマ作戦

零号機起動実験直後、使徒接近の報が入る。ただちに実験は中止された。

作戦本部に戻った蔵馬たちは、ディスプレイ上に映し出された使徒に驚愕する。

「なんですか、あれ？」

ほぼ正八面体の幾何学的形状。どう見ても人類の生物学的概念からかけ離れている。そのようなモノが映っていたのだった。

「使徒よね……？」

蔵馬の質問に答えるミサト。

「パターン青ですので、使徒だと思われます」

オペレータが表示されているデータからそう判断したが、本人も信じられぬモノであった。

「体？に景色写ってますね…… えっと生物なんでしょうか？」

「多分としか」

「なんか常識がおかしくなりそうです」

蔵馬は素直に思った。その思いは一部の人々を除いて同じだ。

「最低でも人型してれば、様子見ながら対応できそうだけど、さすがに無理そうね」

飛行中の使徒が一定の場所に停止した。そして、下部からドリルのようなものが飛び出し掘削を始める。

「今度は何！？」

「この位置は……！！ 使徒、ジオフロント内ネルフ本部へ向かい穿孔しています！」

オペレータが解析して叫ぶ。どうやら直接攻撃を仕掛けてきたらしい。

「なんですって!!」

形状からして情報が少なすぎる使徒に対して、情報を集める。そして作戦会議が始まった。

「これまで採取したデータによりまずと、目標は一定距離内の外敵を自動排除するものと推測されます」

ために使用した武器はすべて使徒に消滅させられていた。

「エリア侵入と同時に加粒子砲で100%狙い撃ち。エヴァによる近接戦闘は危険すぎますね」

「A・T・フィールドはどう？」

「健在です。相転移空間を肉眼で確認できるほど強力なものです」
「生半可な攻撃では泣きを見るだけです。こりゃ」

「攻守ともにほぼパーペキ。まさに空中要塞ね。で？ 問題のフィールドは？」

「現在、我々の直上、第三新東京市0エリアに侵攻」

「巨大なシールドがジオフロント内のネルフ本部に向かい、穿孔中です」

「冗談抜きで敵はここに直接攻撃を仕掛けるつもりですね」

「じゃらくさい。で？ 到達予想時刻は？」

「明日午前0時6分54秒。」

「その時刻には、全ての装甲防御を貫通してジオフロントに到達するものと思われます」

「あと、10時間足らずか……」

10時間しかないのか、10時間もあるのか。どちらにしても時間はあまりないとミサトは思う。

もう、白旗あげちゃうかなどと不謹慎なことを考えた瞬間、閃いた。これなら不可能ではないと。ニヤリと笑った。

「か、葛城さん……？」

横にいた日向マコトはその顔を見てビビった。

「いいこと閃いちやった。やってみたいことがあるの。」

「目標のレンジ外、超長距離からの直接射撃かね？」

ミサトからの作戦を聞いたゲンドウと冬月。冬月はゲンドウを代弁するように言った。

「そうです。高エネルギー収束帯による一点突破しか方法はありません」

「MAGIはなんと言ってる？」

冬月はリツコに聞く。そこでリツコは端末に表示されているMAGIの回答を見せる。

「MAGIによる回答は、賛成2、条件付き賛成が1でした」

「勝算は0.87%か。高い数値ではないな」

「ですが、最も高い数値です」

「そうか、と渋い顔をする冬月。」

「ほかの作戦は？」

「ありません」

きつぱり言い切るミサト。冬月はリツコをちらりと見るが、リツコのその通りという顔をしている。

「そうか」

沈黙し、話を聞いていただけと思われていたゲンドウが口を開いた。

「超長距離射撃。反対する理由はない。やりたまえ、葛城一尉」

「はい」

最高司令官の許可が下りた。

作戦名『ヤシマ作戦』。

作戦内容、二子山の山頂からポジトロンライフルで使徒を超長距離射撃。

エヴァのパイロット控室。蔵馬はすでにプラグスーツを着ていた。

（これ、ぴっちりで着心地悪いな。まあ、妖狐の姿に代わる必要性もないし。問題ないかな。）

頭の中で愚痴っているとレイがやってきた。まだ制服姿だった。

「綾波さん」

レイは蔵馬を一瞥すると、手帳を取り出し、読み始める。

「明日、午前0時より発動されるヤシマ作戦のスケジュールを伝えます。南野、綾波の両パイロットは本日17:00ケイジに集合。18:00エヴァンゲリオン初号機、及び零号機、起動。18:05出動。同30二子山仮説基地に到着。移行は別名あるまで待機。明日0:00作戦行動開始」

一気に読み終わるとすぐに手帳をしまった。

「どんな作戦なのかな？」

「二子山からエヴァによる超長距離からの直接射撃。」

「!? A・T・フィールドを中和せずに？」

「そうよ」

（使徒の目の前に射出されるよりはマシか。でも思い切った作戦にでたな。）

蔵馬は少し考えた。現状最善のような気がした。そして時計を見た。16時をさしていた。

「60分後に出発よ」

その様子を見ていたレイが言った。

「了解」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3941z/>

妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

2011年12月20日21時50分発行